

日中科学技術

No. 25

1982. 2. 20

発行所

日中科学技術交流協会

〒113 東京都文京区湯島3-1-6

小宮ビル2F 電話 03 (836) 4830

第12回常任理事会についての報告

1月27日学士会館分館で第12回常任理事会が開かれた。出席者は次のとおりであった。

(会長) 有山兼孝, (常任理事) 茅誠司, 近藤次郎, 野上茂吉郎, 橋口隆吉, 和達清夫, 渡辺武男, (幹事) 小川智哉, 鈴木昭憲, (参与) 田中脩二郎, (事務局長) 肥後孝

次の諸議題が審議された。

1. 会長報告

(1) 中国科学院との連絡

昨年10月24日の中国科学院代表团との懇談会(会報No.24)の記録を中国科学院に送り、さらにその内容を検討のうえ、後日改めて連絡することを伝えた。その後同代表团からは別掲のような挨拶状が届けられた。

(2) 中国科学技術協会国際部副部长との懇談

昨年12月4日、来日中の中国科学技術協会通訳王瑞林氏から、1月の同協会国際部副部长叶正明氏等の来日が予告され、その際王氏と有山会長との間で予備的打ち合わせが行なわれた。それにもとづいて、1月16日、叶国際部副部长の一行と有山会長とは、長時間にわたって今後の交流の諸問題について懇談した(別項参照)。

(3) その他

(a) 別府大学アジア歴史文化研究者の訪中(会報No.24)の報告書が協会に届けられた。

(b) 中・日・英対照科学技術用語辞典(仮称)の編纂(会報No.23)については、その後いく

つかの技術的な問題が出て、その結果方針が修正されたが、協会としては、今後何らかの協力を求められればそれに応じて対処することになった。

2. 議事

本協会のあり方について

(1) 今後の協会のあり方について、前回理事会での決定にもとづいて(会報No.24)、日中人文社会科学交流協会と今後の両協会の合併の可能性について話しあったが、結論は否定的なものであったことが報告された。

(2) 公益法人化を行う場合、中国との科学技術交流を推進するという立場から考えて、協会のどのような体制が望ましいかについて議論された。

(3) 公益法人化に対して、現在の社会経済状況は必ずしも好ましいものではないことを配慮し、また、経済界の中には日中関係諸団体になるべく一体化の方向をとることへの要望のあることをも含みとして、結局次の方針が決定された。

それは、適当な既存の日中関係の公益法人と充分話し合って、本協会がその組織と合体協力し、本協会としてはその運営面の自主性を実質的に保ち、現在の財政基盤を維持していく可能性を探すということである。

会長を中心として、この方針にそって積極的な検討を開始することが申し合わされた。

中国科学院訪日代表团からの挨拶状

有山兼孝先生

初秋の頃、日本学士院の御厚情あふれるおまねきにより、私ども一行9名は、中国科学者の日本人民に対する友情を抱き、喜び勇んで貴国を訪問致しました。

貴国訪問期間中は、日本学士院の諸先生の心のこもった日程の御手配と貴方の熱情あふれるおもてなしのもとに、貴国学術界の有名な学者と語りあう機会を得て、中日両国の科学者はさらに一層友情と学術思想の交流を深めることができました。このたびの訪日は、時間こそ短いものでありましたが、私どもは多くの収穫をあ

げ友情を深めました。謹んで貴方に心からお礼を申し上げます。

中日両国が子々孫々にわたり友好的でありますよう、中日両国の科学交流が、新しい友人と古い友人が力をあわせて努力することにより、必ず日まじに盛になりますようお祈り申し上げます。

再会をたのしみにしております。

貴方と貴方の御家族、そして日本の皆様に心から御挨拶申し上げます。

中国科学院代表团

1981年11月18日

中国科学技術協会国際部叶副部长との懇談

日 時 昭和57年1月16日(土) 10.00～16.00

場 所 日中科学技術交流協会

出席者 中国側：叶正明中国科学技術協会国際部副部长、金若宣同アジア州処長、秦建廷同幹部、倪信興、張宇傑中国大使館(科学技術担当)書記官

協会側：有山兼孝会長、肥後孝事務局長

1. 協会活動並びに運営に関する基本問題

総会報告の昭和56年度事業計画を中心に、協会がその基本的使命並びに自然科学の専門家頭脳集団としての幅広い世話役的プロモーター機能を生かすように運営に努めていることを説明した。とくに協会が民間の公益団体として、柔軟に弾力的な態度で交流事業を行うために、協会のあり方及び法人化問題等をも真剣に取り上げている事情は大よそ理解を得たものと認められる。しかも、これらの問題は、両国間の科学技術協力協定に基づく政府間協力のあり方とか、中国における経済調整の影響、またこれに伴う中国科学技術協会活動の停滞、さらには、中国科学院の改革などが交流

事業にどのような変化を齎すのか、そして中国側諸組織の中国内での役割の変化について、先の見通しがつかめないことが関連して、協会が一層悩んで来た事情も理解されたものと考える。

2. 中国科学技術協会の国内任務の概要

(1) 中国科技協と学会との関係

(a) 同協会は、自然科学の四大分野(理・工・農・医)における97の全国的学会、団体を総合する民間団体である。各省、市、県に夫々地域科学技術協会を傘下に有している。全国及び地方の科技協は全国又は各地域の学会等の横の連絡を図る組織である。

(b) 学会は、当該専門の教育者、研究者、技術者の学問上の経験交流を行うための組織として毎年会議を開く。全国的な学会は、地方(省・市・県)の科技協から全国的な科技協に上げられてきた問題及び事項に関して、中国科技協の委託に応じ、その専門事項について諮問に答える役割を果たすことになっている。

(2) 中国科技協の主要任務

(a) 学会との関係……科技協は各学会の横の活動

を組織し、その連絡を図るため、学術交流の機会（シンポジウム、座談会など）を設ける。

(b)科学普及活動……(イ)国民の科学技術知識のレベルアップとその普及のため、科学技術の教育及び指導に関することを組織する。(ロ)将来の人材育成のために力を入れているのは、少年少女に対する課外活動としての科学技術普及活動を××クラブ、××キャンプ等として行うことである。とくに夏・冬の休暇の季節に集中的な生物キャンプ、校外キャンプ等を組織し、又は援助する。(ハ)一般国民に対する各種の科学技術活動を組織し援助する。

(c)技術コンサルタント……これは最近発足させたものであるが(イ)大型技術に関するコンサルタント業務であり、項目によっては省に対する計画的な技術評価の仕事も行う。(ロ)産業に関して、工場、農場等に対する技術コンサルタント業務も行う。

(3)科技協と中国科学院との関係（当方質問に答えて）

科学院は所属の110余の研究機関（主として理学系で少数の工学系のものがある）においてテーマに応じた研究を行っているが、その研究者は学会に所属する形で科技協とのつながりをもつ。しかし、学会は科学院以外の大学及び研究機関研究者も入っており、学術交流、学会管理等は科技協の関係の仕事といえる。

(4)国際交流の仕事の運用面（当方質問に答えて）

例えば、昆虫学者の訪中の場合に、日中科学技術交流協会から派遣される学者の交流の相手方が、中国科学院の所属研究機関のみで済む場合とか、科学院以外の研究者との接触があまり必要でない場合、つまり科学院関係の専門交流が過半を占める時は、中国科学院に全日程の世話を頼むことにして欲しい。その場合、科学院は協会及び学会との連絡をとりつつ目的達成に努めるよう、中国内部の了解はとられている。逆の場合、つまり、科学院関係のウエイトが低いときは、中国科技協の国際部が窓口となって、学会及び科学院を含めて依頼に答えられるようにする。

3.中国科技協と協会との今後の関係

両者は、学会及び研究者との関係では、交流の強化発展のために双方ともに多くの共通点があることを認識した。従って毎年の交流を計画的に行うためにも、随時緊密な連絡をとると共に、最低年1回は連絡打合せの場をもつことにしたいとの申し出があり了承した。また双方は、お互いに良いと考えることは、直ちに実行できないことであっても可能な条件などを連絡し合って、お互いに検討し合い、意見交換をして行くように努力することを了承した。

4.交流計画の諸案件について

(1)鍼灸交流

(a)協会がかねて(社)日本鍼灸師会、(社)全国鍼灸学会と協議中であった中級以上の鍼灸専門家訪中団（仮称）の計画について中国側の協力を願いたい事項を訴え、帰国後なるべく早く具体化に必要な回答を寄せることとなった。

(b)中国側から、中国の鍼灸専門家を訪日させ、日本で中国鍼灸の実務（初級及び中級）を学びたいとする人々の要望に応える用意がある。このため、当協会が中心となって、その研修会を組織することを具体的に研究して欲しいとの申し出があった。この件については(a)の訪中団の後援団体とも協議のうえ、回答することを約した。

(c)先に提案があった初級研修は、個々に申出があればその都度実施したい。

(2)56年度会員アンケートの回答者の要望事項

中国側で検討を求める交流課題についてアンケート回答の趣旨と内容を紹介した。これに対して中国側は関係学会等と協議の上、受入条件、実施希望又は再照会事項、あるいは受入できない理由等を回答することを約束した。

(3)将来の交流協力について検討すべき事項

(a)中国における中級・上級指導者育成のための専門家派遣（滞在費中国側負担）について、当面の計画として、

(イ)短期（滞在2～3週間のうち若干の観光等を含む）大学・研究機関の定年退職後の専門家等

中国側の希望するテーマにつき、中国主要地 3 カ所程度で、豊富な経験に基づく講演等をお願いする。

(甲)中期(1~3 カ月滞在)定年退職後あまり期間を経過していない元気な方(65才までを考慮している由)に集中的な指導をお願いしたい。

この申し出は、協会が専門家の頭脳集団として、その世話役的機能を果せる最も適した性質のものとするので、指導希望の専門事項及び希望等を具体的に示して連絡があれば、協会として、先生方の協力を得て、適任者派遣に努力することを約束した。

(b)青少年科学知識普及等について

(イ)青少年教育の理科教材の展示会……先に中国科技協から申出があったが、このような企画は、その費用等に負担がかからない適当な規模にできるものならば、中国の青少年の理科教育の参考として適当で、北京以外の地にも展示しようような構想として実現することが望ましいのではないかと。簡単には実現できまいが、場合によっては、協定

ベースにのせて、中国青少年の理科知識の普及向上の為政府が補助金等を支出し協力するならば、新しい展望が開けるのではないかと。そうした取り組みには企画を固めるまでに相当の時間を要するであろうが、検討課題とすることは考えられようとして先方も検討の上連絡することとなった。

(ロ)日本の優れた科学映画について、中国で利用可能な道が開かれるならば、(イ)に準じて、中国側でも研究するので、今後の相互連絡にまつこととする。

(ハ)その他、中国側で気がついたことは連絡・照会するので、可能・不可能の条件などについて検討を依頼された。また日本側でも適当と思われるものがあれば、随時連絡されたいとの要望があった。

(c)毎年定期的に双方が打ち合わせの機会をもつ
以上の経過に照らし、中科技協の国内任務に役立つと思われる交流事項に関して、双方が協力すべき諸問題の発掘と検討について、今後相互に忌憚のない意見交換及び連絡を行うように努めることを約した。

古人類と古文化をテーマとした

別府大学訪中団からの報告

別府大学アジア歴史文化研究所 二宮 淳一郎

私たちは、協会の組織する科学技術専門家訪中(自費)の第一陣として、1981年11月19日から12月3日にかけて訪中させていただいた。このことはすでに会報No.24に報じられている。協会からのつよい御推薦のおかげで、訪中希望の申出から異例ともいえる短期間のうちに中国科学院から正式の招聘が届いたばかりか、中国内でも種々格別な取扱いを受けることができ、私たちに大きな成果をあげたと考えている。

この点まず会長、事務局長はじめ協会の皆さん、中国科学院外事局崔泰山副局長、同古脊椎動物古人類研究所(IVPP)呉汝康副所長はじめ多くの関係者に心からお礼を申し上げねばならない。

以下、経過や内容をあらまし報告して、今後の交流活動の参考に供したい。

1. 訪中決定までの経緯

協会から「科学技術専門家の自費訪中希望調査」の要請を受け、すぐにこれに応じたのが9月上旬であった。

実は、別府大学では1980年7月第1次学術訪中団8名を中国に送り、その結果を受けてアジア歴史文化研究所を設置した。1981年度は、この研究所の事業として古人類・古文化を中心とした訪中団を再度送りたいということで、かねてから交流のあったIVPPの呉汝康教授と若干の折衝をはじめていたところであった。協会は私たちの申出を検討され、計画が具体的で実現の可能性も高いと評価して、9月9日中国科学院に訪中承認方を要請してくれた。ところが、呉汝康教授から9月18日付で、訪中歓迎の旨と前記15日間の行動日程案が届き、追いかけて10月5日付中国科学院

から私たちの訪中承認の連絡が協会長宛に届いたのである。

これまでの経過は、おそらく、協会—科学院—IVPP—科学院—協会と通じたのであろうが、この手続きの往復は関係者を驚かすほどの速さであった。IVPP からの日程案は、若干の問題点を残しながらも、私たちの希望をよくくんでくれたものであったし、出発予定日も差し迫っていたので、原案どおり諒承することにし、あらためて協会を通じて正式の要請を科学院に出していただいたのである。その結果、10月22日付で正式の招聘状が届き、私たちの訪中が決定した。

2. 訪中 15 日間の経過

私たち訪中団の構成は、前記研究所長二宮淳一郎 (人類史)、同研究員賀川光夫 (考古学)、坂田邦洋 (人類学)、狭間久 (歴史学) の 4 名。11月19日北京より入国、12月3日上海から出国。北京 5 泊、西安 3 泊、昆明 4 泊、上海 2 泊で、遺跡 7、研究所や大学 8、博物館など 7 を訪問・見学したいという少々欲ばった計画であった。中でも北京ではじっくりと腰をすえて化石や石器を観察したかったし、雲南省昆明では近郊の禄豊や元謀の遺跡をたずねて、数百万年前の古猿や原人の生活環境を確かめたいなどと考えた。特に禄豊では IVPP の研究者たちがちょうど発掘作業中ということで、私たちはまたとない機会を喜んでいたのであった。

1. 北 京

11月19日成田から北京についたのは 22:05。呉教授が出迎えてくれていたのには、懐しくまた恐縮もしたが、それだけではなく後で禄豊の発掘現場で研究所員に聞いたところでは、すでに発掘を指揮されていた教授が私たちを出迎えるためにわざわざ北京に帰られたという。これにはまったく頭の下がる思いがした。ともかく前年 7 月以来の再会を喜び合いながら税関も特別通過、幸いにも予想したほど寒くない首都飛行場路を研究所のマイクロバスで、ひとまず宿舍の北京友誼賓館へと向った。

翌朝早々、呉教授が通訳の朱淑蓮さんとともに宿舍に来られる。朱さんは IVPP の若い研究員李有恒さんの奥さんで、国家地震局地質研究所の研究員、日本語歴 2 年とか。

ここで私たちの行動日程が最終的に確認されたが、残念ながら西安での藍田原人遺跡と南京から遠くない和原原人遺跡はやはり見学不可能。まったく予期しなかったのが、昆明滞在を 2 泊に短縮しなければならないということだった。昆明・上海間の飛行便が週 2 回しかないためということなのだが、私たちは前述のように昆明周辺を 1 つの重点にしていたので、なんとかやりくりをと考えないでもなかったが、中国側の迷惑を思って無理強いをしなかった。昆明では禄豊遺跡参観だけ—それは充分に有益ではあったが—ということになった。

15日間の日程を確認して、北京 5 日間の行動から早速開始された。以下その概略を報告したい。(記述の順序は必ずしも時間的経過を追わない)

○ 研 究 所

IVPP は友誼賓館から遠くない西直門外大街に面し、東に北京天文館、斜め向いに植物研究所や北京動物園がある。研究所には下等脊椎動物、高等脊椎動物、古人類の 3 部門があり、全所員 240 余名、その約 1/3 が研究員、季刊の研究誌「古脊椎動物与古人類」はいま 20 巻を数えるが、近く両部門を分け本年 7 月から“人類学報”が季刊誌として創刊されるという。

私たちは呉教授研究室で挨拶もそこそこに早速化石をみせてもらった。まずラマピテクスの頭骨、一昨年 12 月雲南省禄豊で発見された世界最初の頭骨である。手のひらにのるほどに小さいが、ほぼ完全なもの。手にとって上から下から詳しく観察したが、いくつもの点で明らかにヒトの形質もっている。これまで頭骨 4、上・下顎骨 30 以上、歯 400 本が発見されているが、いま発掘中の禄豊ではまたいくつかの新しい発見もあるといい、現場の見学がいよいよ楽しみになった。

呉研究室の向いの部屋で、研究員の呉新智さん、

呉茂森さん、董興仁さんらが、それぞれ担当の化石をつぎつぎにもってきて見せてくれた。巨猿、藍田原人、北京原人、和県原人、大荔人、馬壩人、



IVPPにて・ラマピテクスの頭骨を
みる呉汝康先生と筆者

柳江人、山頂洞人。巨猿の下顎骨の他はいずれも立派な頭骨で、一昨年見せてもらった資陽人を加えるとまさに猿人から原人、そして旧人から新人まで、人類の起源から現代人までのすべての段階の化石がいま目の前にあることになる。研究所は私たちに、北京原人第V頭骨の模型を贈ってくれた。すばらしく貴重な記念品で、私はその後の全行程をしっかりと抱いて歩いた。

旧石器専門の邱中郎さんは北京原人の石器や焼けた石をみせてくれた。原人たちのすぐれた生活をしのんで余りある。石器はあらためて北京北の郊外のIVPP 陳列所に出向いて、いろいろと見せてもらったが、170万年前の元謀原人の石器3個もその中にあった。またこの陳列所の構内には、レプリカ製作の工作室があり、私たちは特に希望してここも参観することができた。

研究所図書室では前所長楊鐘儂先生の遺蔵書7000冊の一部をみせてもらった。いま精力的に整理がすすめられており、中に鹿間時夫さんの論文集など日本のものも多く見受けられた。

北京では、この他社会科学院考古研究所を見学した。副所長王廷芳さんは、郭沫若先生の詩碑除幕式のため別府に來られ旧知であり、安志敏さんは日本語の上手な方で、研究所の概要をきいた後、陳列室、年代測定室など見学させてもらった。

また科学院動物研究所を呉教授に案内していただいた。ここの陳世驥所長の書かれた進化論についての論文をいくつかかかつて翻訳して紹介したことがあり、ぜひ表敬したいと思っていた。先生は喜寿を迎えられてますますお元気で、進化論の最近の動向や、教育の現状などについての意見も伺えた。今年はダーウィン没後100年に当るが、中国でも記念の催しが企画されているという。

○ 遺 跡

今度参観した遺跡は、いろいろな事情で北京周口店、陝西大荔、雲南禄豊の3ヶ所だけになったが、いずれも貴重なものばかりで収穫は大きかった。後の2ヶ所については後述する。

途中、霧が深く道を間違えたりして周口店まで3時間を要した。ふつうなら1時間で行く。案内の呉新智さんが、私の持っていた磁針を頼りに方向を定めながら、この道は最初に北京原人の頭骨を発見した裴文中先生が、毛驢(小さなロバ)に乗って周口店に通ったのだなどというものだから、道を間違えたのもまた貴重な経験ということになった。呉さんの案内でこの遺跡竜骨山の猿人洞から山頂洞へとくまなく見学した。歴史的にいたって貴重な遺跡であると同時に、いまもまだ発掘中で“生きた遺跡”という実感を私たちはもたされた。

○ 博物館

周口店に設けられた「北京猿人展覧館」は、一つの立派な人類史博物館とっていい。北京・西安・杭州・上海でそれぞれすぐれた博物館を多く参観したが、周口店のこの展覧館の充実ぶりには

眼をみはらされた。北京原人や山頂洞人を中心に人類史が紹介されていることはいうまでもないが、題材はさらに広く人類の起源と発展の問題を総合的に理解させようと努めていることがよくわかる。この点、それぞれの力点のおき方はちがいながらも、北京自然博物館でも上海自然博物館でも同様に感じたことであった。中国での博物館活動の美事さには、私たちが多く学ばねばならないことを痛感した。

北京到着以来 6 日間というわずかな滞在であったが、ほんとに意義深いものであった。やや大きさにいえば、中国古人類学の全貌を概観することができたと言えよう。この間 IVPP の皆さんはじめ、多くの方々が実によく私たちにサポートしてくれたことを心から感謝しなければならない。私たちが北京に着いた翌日の夕刻、呉汝康教授らは私たちを民族飯店に招待してくれたが、呉教授のすすめてくれた涮羊肉(シャブシャブ)の味と、周明鎮副所長とたびたび交わした乾盃の茅台酒の薫りは終生わすれられないものとなろうし北京を去る前夜、私たちの設けた北京烤鴨(ペキンダック)の席には科学院の崔先生や考古研究所の王・安両先生も参加されてたいへん賑やかな一夜を持てたことも長く心に残るものになるであろう。

11月24日夕、私たちは呉汝康教授に伴われて北京を後にしたが、空港では呉新智さん、朱淑蓮さんがいつまでも名残りを惜しんでくれた。

(ii) 西 安

北京の出発が3時間おくれて西安に着いたのは20時すぎ。科学院西安分院の張小安さん、通訳の同分院自然弁証法研究室の劉信升さんに迎えられ、乗用車2台で宿舎西安人民大厦へ。翌朝早くから

大荔人遺跡見学ということで、打ち合せも早々に切りあげる。

○ 大荔人遺跡

11月25日、朝早くから東北130Kmの道をジープ2台で走る。昼前大荔県城で同県文化局副局長崔杰生さん、文物管理処の張青山さんに乗せたジープ1台が加わり、さらに25Kmほど荒りょうとした黄土地帯を走りつづける。ようやく小さな部落があり、そこを抜け切った台地の上でジープをすてる。ここは陝北高原の南端、眼下に洛河が流れ、そのふちにも小さな部落がある。

台地の端を下り大きく左に廻ったところが1978年3月大荔人の頭骨が発見された場所だ。見上げると30mはたしかにこえるにちがいない黄土の堆積の下に灰褐色の礫層が走っている。北京のIVPPでみた、あの頭骨がここに眠っていたのだ。いまも貝の化石などがあちこちに埋まっている。

大荔人は、原人を現代人につなぐ環であると最近とくに注目されている。大荔すぐ西に約80万年前の藍田原人がすみ、また東の山西省丁村には10万年前の丁村人がすんでいた。中間のこの大荔人は約15~20万年前のもの。黄色人種の系統がこれにつながったと呉汝康教授はみるのだ。

20万年の歴史をしのび

ながらもういちど堆積した黄土を上に見あげて、私たちはアッと声をあげた。黄土の頂きにぎっしりと黒い人影が並んでいる。さきほど通りすぎた部落の人たちが総出で私たちを見おろしているのだ。聞けば、この遺跡を訪れた外国人は私たちが3番目だという。

大荔県城に帰り、少々辛味のきいた土地の料理を御馳走になって、すでに日暮れた西安への道を満ち足りた気持でまた戻っていった。



北京烤鴨にて・前列左から崔泰山、王廷芳、周明鎮、呉汝康の各先生ほかIVPP考古研究所のみなさん。

西安第 2 日は、秦始皇兵馬俑博物館、始皇陵、半坡博物館を見学。いずれも中国の古い歴史を知るに貴重だが、この道を東南に向ければ藍田原人の遺跡があると思うと、見学できないことがやはり残念に思われてならない。午後、休憩の後呉汝康教授を囲んで勉強会をもった。いろいろな話もうかがったが、1・2を紹介しておこう。まず北京でみた和県原人について。このたいへん完全な頭骨は、1980年11月4日、安徽省和県竜潭洞、南京から西に約50Km、長江下流の北岸にあるこの洞穴で発見された。中国東南部でははじめての原人化石の発見であり、古人類の分布を考える上できわめて貴重だという。この化石についての研究はほぼ目鼻がついたので近く発表されるだろうと聞いてきたが、私たちは帰国後、「科学通報」1981年第24期号でその報告をみることができた。

つぎはラマピテクス。その頭骨が世界ではじめて発見された遺跡を私たちはこれから雲南にたずねる。すでに「科学通報」や「人民中国」「中国画報」などの報告で、呉教授らはこれが明らかにヒトの系統に属するものと考えていると私たちは理解してきたのだが、ここで直接に話を聞いて意外と慎重なものにはむしろ驚かされた。私たちも北京でみることでできた頭骨には、ヒトの特徴を示す形質が多く表われている。その限りでは、ヒトのもっともはじめの先祖とみなすこともできなくはないが、このラマピテクスは1400万年から800万年前、明らかに石器をもったアウストラロピテクスらはせいぜい3~400万年前であって、この間はまったく空白。まだまだ人類の発展過程を明らかにするには資料が充分でないといわれてみれば、その意見にうなずかざるを得なかったのである。

ラマピテクスについてのさらにつこんだ議論や禄豊の話は明日現地についてからということで、みな自分の部屋に引きあげた。

(iii) 昆 明

11月27日、いよいよ雲南に向う行程。張さん、劉さんに送られて霧の西安を発ったのが08:05。途中重慶に寄港し昆明着が11:43。重慶は冷たい

雨だったのに、昆明に近づくとつれて窓からさしこむ日の光が次第に強く眼をうる。山の緑があざやかに、湖の色も紺碧。北の北京や西安ともっとも大きく違ったのが土の色。焼けつくような強いレンガ色だ。これこそ800万年前の人類の祖先を生みだした色かと思う。

空港には、科学院昆明分院の戴禧融主事とIVPPで旧知の陸慶五さんが出迎え。昆明賓館で昼食後、科学院のマイクロバスで早速出発。途中この訪中ではじめての「観光」を滇池の西岸にそびえる西山へ。滇池を見おろす絶壁の上に立ったのち、3時すぎ、いよいよ禄豊へ出発。成昆鉄道沿いのユーカリの並木がづく道をもつばら西へ。畑の麦の緑が美しく、小川には水牛、池にはアヒルがたわむれている。白壁に瓦屋根の農家のつくりは日本とそっくりに見える。103Km、ちょうど2時間走って禄豊県招待所に着いた。出迎えてくれた発掘副隊長の韓徳芬さん、隊員の徐慶華さん、どちらもいろいろな報告ですでに名前は知っていて初対面とも思えない。韓さんは眼のやさしい小柄な女性、徐さんは眼の光ったエネルギッシュな好青年。その夜、みなさんとともに韓さんから禄豊遺跡についてのレクチャーを受ける。

この遺跡は、1960年成昆鉄道修築のとき発見。75年から現在までIVPP、省博物館、県文化館の手で発掘がつづけられ、78年シワピテクスの頭骨、つづいて80年12月1日に世界最初のラマピテクス頭骨が発見された。いまもまた10月27日から12月末までの予定で発掘中とのこと。遺跡周辺の地史や、発掘された動物化石、ラマピテクスの生活様式などさまざまな問題について解説を受け、いよいよ翌日の見学を期して部屋に帰った。

11月28日、いよいよ禄豊遺跡へ。宿舎から北に約9Km、成昆鉄道の鉄橋がみえ、そのうしろの小高い丘の南斜面が遺跡だという。発掘隊の宿舎にあてられた農家の庭や隊員の部屋にひろげられた紙つつみや箱入りの化石が私たちを迎えてくれた。ウマ、ヒツジ、サイなどの骨、カメの甲、ゴマ粒ほどの魚の歯、それに新しく掘り出されたラ

マピテクスの門歯、臼歯。それらの一部を見せてもらって、いよいよ発掘現場へ。

鉄橋を右手に通りすぎるともう現場。赤土の斜面が切りとられて黒々とした褐炭の層があらわ。IVPP、雲南省博物館からの隊員12名、近郊の農民約40名の発掘隊。呉、韓、陸、徐のみなさんの他祁国琴、潘悦容、陳万勇、長紹武、時福橋、張興永、鄭良、肖明華の男性9、女性3の研究者。

農民のなかには、ラマピテクスの頭骨を世界最初に掘りあてた周浩明君18才がいた。彼が掘りあてた第一頭骨は、南北約50mの発掘断面の左側約15m、露呈高度4・5mのところ、「この

あたりでした」と指さす彼の眼はいかにも満足そうだった。今度の発掘も約20mの幅ですすめられているが、あちらでもこちらでもという感じで化石が掘りだされている。その現場をのぞきこみ、くわしく説明をきく私たちの動きを、上海科学映画製作所のカメラマンが追いかける。「禄豊古猿遺跡」を撮っているのだという。完成のときには日本でも見たいものである。私たちも若い農民の間に入り小さな木の椅子に腰をおろして、包丁のような刀で石炭層をしばらく掘りおこしてみた。すぐには化石も出てくる様子はなかったが、発掘に参加したという、かすかな満足感にはひたることのできた。

私たちは鉄橋の上から付近を展望した。遺跡は高度1600mの雲貴高原にあり、山を背に南向き、眼の下には南北にながれる西河が望める快適な場所。かつてこの盆地は湖であり、温暖湿潤な気候

のなかで生い茂った森林の間にひらけた草原があったと想像される。あの河のふちには温泉がでてよく汗を流すのですよという話に、ラマピテクスは入ってきませんかと笑いあったものである。

今度くるときは、もっと時間をとれるようにと期待を残しながら呉教授らと車で現地を後にした。その夜には昆明に帰り、翌朝早く上海に向わねばならない。私たちの車を追って手をふる徐さんの



禄豊発掘現場にて。前列左1 韓徳芬，後列左1 徐慶華
後列左3 陸慶五，左5 呉汝康ほか発掘隊のみなさん

「再見」という大きな身振りに胸がぐっとしめつけられた。わずかな時間であったが得たものは大きく、私たちは満足していた。

帰国後もらった呉、韓さんからの手紙には12月中旬

発掘終結、今回もラマピテクス、シワピテクスその他多くの化石を発見したとあった。詳細を期待したい。

(iv) 上海・杭州

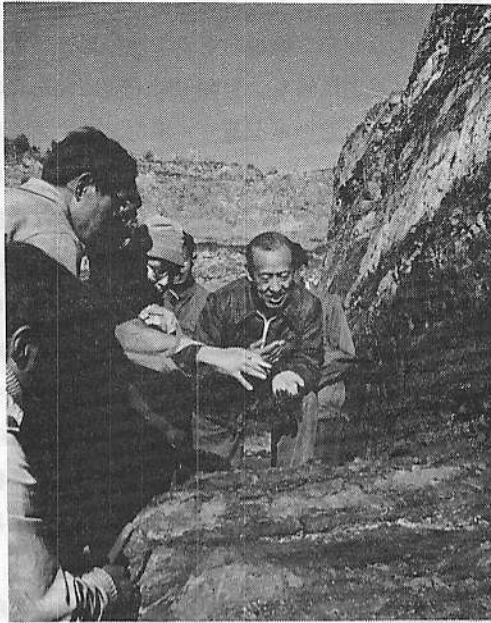
呉、韓、陸さんの見送ってくれた私たちのL-14機は、なんと3時間遅れて10:23昆明発。途中貴陽、長沙、南昌と立寄って上海着は18:20。ジェットでは2時間40分という。

予定が変わって上海4泊となったので、1日杭州にでかけ、古代農業で有名な河姆渡遺跡の出土物を収蔵する浙江省博物館を加えて、もっぱら博物館見学を主とすることにした。

○ 博物館

上海博物館では副館長黄宣佩さん、浙江省博物館では副館長徐潤芝さんの案内でそれぞれ特徴的なたくさんの収蔵品を見学させてもらったが、ここでは上海自然博物館についてだけ報告する。処

長潭治さん、人類史担当陳翁良さんが応接案内してくれたが、1956年発足以来、1. 標本の蒐集 2. 科学の普及 3. 科学の研究 を柱に運営・活動しているという。昨年度は計71万人、いま毎



緑豊発掘現場にて・中央、呉汝康先生

日約 2000 人の参観者があるという。私たちは特に人類史展覧の部分を中心に参観したが、人類進化の歴史について多くの標本、レプリカ、図解、装置を実にうまく使いこなして分りやすく展示してあるのには感心した。5階のレプリカ工作室も見学したが、なんと7名もの技術者が常勤しており、あらゆる模型・標本を手がけ、ここの博物館だけでなく全国にも製品を提供していると聞いて驚いた。

ここでは季刊の雑誌「博物」を編集発行しており、また『生物進化論』『人類的起源』などの解説書もたくさん発行している。「博物」1981年第3期号には、陸慶五さんの「掲開人類起源奥秘の新声」という、人類の進化におけるラマピテックスの位置についての解説が載っている。

3. 第二次訪中の成果

私たちは2年連続して訪中した。それぞれ意義の多い訪問であったが、今回はその前に比べて格

別な成果をあげることができたと思っている。その特徴的な点をいくつかあげておきたい。

(1) 今回の訪中は、15日間という短期間であったが、訪問・参観した研究所3、博物館11、遺跡3を数え、交流した研究者等は37名にのぼった。

(2) 日程、訪問先等、特定のものを除いてほとんど私たちの希望が入れられた。

(3) そのような中で、中国古人類学の成果をつぶさに視察することができ、人類の起源と進化についての理解を深めることができた。

(4) 多くの研究者と交流し、また資料等を交換することができ、今後の研究交流の基盤が強められた。

(5) 専攻学生や卒業者などの訪中研修についても、また中国古人類学の成果に関する日本での共同出版についても話し合わせ、今後具体的に検討することになった。

(6) 以上のような諸成果をあげることができたのは、今回私たちの訪中のシステム、つまり日中科学技術交流協会と中国科学院との間の専門家訪中についての取り決めと、それを具体的に支えてくれた古脊椎動物古人類研究所の援助の賜以外にない。

今後の日中科学技術交流がいよいよ発展することを期待して報告を終りたい。

昭和57年度会費お払込みのお願い!!

会員の皆様のご厚情・ご支援を深謝いたします。56年度は、事務の軽量化と運営面充実の基盤作りに懸命の努力をして参りました。

中国の経済調整も科学技術重視の具体的な動きが判り始め、協会内外の活動活発化の機が熟して参りました。4月からは57年度を迎えます。ここに会費の御請求を同封いたします。新年度の当初運営の円滑化のため、3月中にもお払込み賜わりたくお願い申し上げます。